

- ウサギ舎内に日が差すようにし、明るく保つ
- こまめにネズミ取りを仕掛けてネズミを捕まえる
- ネズミにウサギの餌を食べられないよう残飼を片づける
- 飼料の保管はタンやセメントで囲うなど万全を期する

(特に外気温の下がる秋口に侵入してくることが多いのでネズミがいなくなった場合でも毎年秋口には徹底した対策を行うべきです。)

以上によりネズミが住みにくい環境に保つと、ネズミが出て行くか寄りつかなくなります。

②犬、ネコ

犬、ネコとも口内にパストレラ菌を常在菌として所有しているため、犬、ネコに触れたままウサギの管理を行うのは好ましくありません。また野犬による絞殺、野良ネコによる子ウサギの補食も起こりますので、ウサギ舎の出入り口は頑丈なものにしておく必要があります。さらに、ヒトに慣れている大人しい犬やネコでもウサギにとっては肉食動物が近くにいるというだけで大きなストレスとなりますので、ウサギ舎に近付けさせないことや鳴き声も近くでしないように注意して下さい。(大人しいライオンや大蛇が部屋の中で放し飼いになっている状態に自分が置かれた状況をイメージして下さい。)

6. 人畜共通感染症

ウサギから人間へ感染する疾病はさほど多くはありませんが、全く感染しないわけではありませんので、注意して接して下さい。

(1) 皮膚糸状菌症

この病気は、飼育ウサギから人間に最もうつる可能性があり、感染した動物に引っかけた傷から感染し、症状としては傷が膿み、広がって行きます。

(2) 野兎病

この病気は、ノウサギ、アナウサギ等の野生動物にみられる伝染病で、飼いウサギからはほとんど感染しませんが、ノウサギが生息している地域でありかつ野兎病の常在地では、屋外の飼育舎で飼われているウサギが昆虫の媒介により感染する可能性があります。人間への感染経路は、感染した動物の血液、組織への接触、蚊やダニなどの節足動物の媒介によります。症状としては、発熱、頭痛、リンパ筋腫脹、皮膚や上部気道の潰瘍等です。

(3) パストレラ症

この病気は、ウサギには頻発しており、感染したウサギに咬まれたり、引っかけられたりすることによって感染することがあります。症状としては、感染した部分が赤く腫れ、激しい痛みが起こります。また、風邪に似た症状が出ます。

7. ウサギの正常値

ウサギについて体温等の正常値を把握しておかないと、いざ体温を測定しても平熱なのか高熱なのかの判断ができません。ウサギを実験動物として使用する場合には、こうした生理値の範囲が明確になっていないと実験結果の判断ができないという事態に陥ります。材料用として飼養する場合にも健康状態を把握する上で正常値を把握しておくことが重要です。以下に一般的な正常値を紹介しておきますので参考にして下さい。

表26 体温等の正常値

体温	38.0～39.6℃
心拍数	130～325回／分
呼吸数	32～60回／分
赤血球数	4～7百万／ml
白血球数*	9千～1万／ml

資料「ウサギと齧歯類の生物学と臨床医学」

*ウサギの好中球は好酸性顆粒を含むため好酸球と間違えやすいので注意

表27 尿組成の正常値

尿量	20～350ml／kg／日
比重	1.003～1.036
pH	7.6～8.8
クレアチニン	20～80mg／kg／日
尿蛋白	0.7～1.9mg／kg／日

資料「うさぎの臨床」

表28 血液成分の正常値

グルコース	75～150mg／dl
アルブミン	2.7～4.6g／dl
グロブリン	1.5～2.8g／dl
尿素窒素	90～220mg／l
クレアチニン	7～15mg／l
総ビリルビン	0.25～0.74mg／dl
カルシウム	12～17.3mg／dl
マグネシウム	15.8～32.4mg／l
クロール	96～109mmol／l
カリウム	3.4～5.1mmol／l
ナトリウム	138～148mmol／l
リン	4～6.2mg／dl
アルカリフォスファターゼ	18～192IU／l
クレアチンフォスフォキナーゼ	105IU／ml
LDH 雄	94.3U／l
LDH 雌	104.8U／l

資料「うさぎの臨床」

表29 各血清成分値の持つ意味

総ビリルビン(胆汁色素);胆機能(特に黄疸)

クレアチニンフォスフォキナーゼ;筋肉、脳などの組織細胞の障害

クレアチニン;腎臓の働き

グルコース(血糖);膵臓機能、栄養状態

LDH(乳酸脱水酵素);癌、肝臓病、心臓病(但し、運動、妊娠、溶血等で変動)

アルカリフォスファターゼ;胆汁の流出経路の異常、骨の新生状態、肝機能

尿素窒素;腎機能

8. 薬物等の投与

(1)皮下注射

皮膚を軽く摘んで筋肉に注射針が刺さらないようにして注入します。成熟ウサギでは一箇所には4～5mlくらい注入できますが、それ以上の量では別のところに分けて注射します。

(2)筋肉注射

大腿部の筋肉に垂直に注射針を差し込んで注入します。注入量としては2ml程度であり、連続投与する場合は右と左の大腿部に交互に注入するなどの注意が必要です。注入後は薬液が拡散するようによく揉んでおく必要があります。

(3)静脈注射

耳介辺縁の静脈に注入します。血管が見つらいときには皮膚を擦ったり軽くたたいて下さい。ウサギは血管が弱いので採血後しっかり止血してやらないと内出血が起こりやすいので注意が必要です。

(4)経口投与

液剤の場合、口角からスポイトやシリンジで流し込み、ウサギが液剤を飲み下し始めたらそのスピードに合わせて注入します。

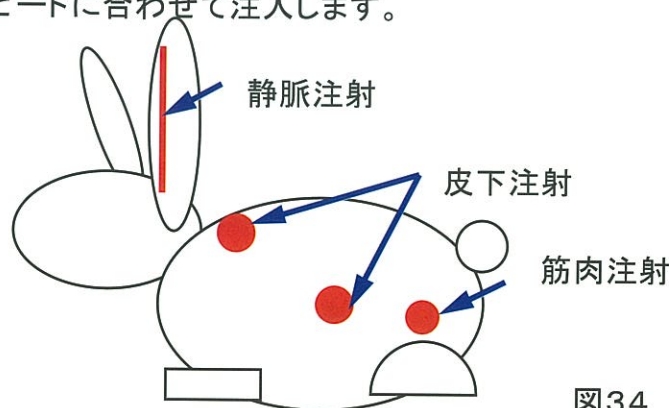


図34 注射部位